

右手を頭上に挙げ、空中に漂う何かを捕えるようにして、自分の胸にはこぶ——。祈りでも、同情でもなくただひたすらに死者を「悼み」続ける主人公・坂築静人。新聞の死亡記事を頼りに「この人は誰に愛され、誰を愛し、どんなことで感謝されてきたか」と聞きながら彼は全国を旅する。物語はそんな静人を中心に人間不信の週刊誌記者、夫を殺した女性、末期ガンを患った静人の母親の 3 人の視点で語られる。何故静人はそのような不可思議な旅を続けるのか？その問いを求めページをめくる手が、途中何度か止まりそうになる。それぞれにどうしようもない思いを抱えた登場人物を通して、自分自身も生と死を真正面から考えざるを得なくなるからだ。

本書が出版される少し前、秋葉原で無差別殺傷事件が起こった。白昼に一般市民を多く巻き込んだこの事件は連日大きく報道された。その報道も 1 カ月ほどすれば治まり、私自身も事件を忘れていた時、ふとしたきっかけで裁判を傍聴することになった。秋葉原の街ももとの姿に戻ってきた頃だ。目撃者の事件当時の生々しい証言や、涙ながらに自らの思いを語る被害者の恋人。証言を聞きながら、たった数ヶ月前の事件内容をほとんど忘れていたことに気付いた。そして通路を挟んだ隣の席で、椅子からずり落ちながら居眠りをする記者を見て、何かドロリとしたものが自分の心に流れ込み、息が苦しくなった。あんなに世間を騒がせた事件もあつと言う間に忘れ去られてしまう。それは仕方がないことだと分かっているが、やるせない気持ちになり、私は傍聴しながら漠然と『悼む人』を思い出していた。

「聖者なのか、偽善者か？」この問いの答えを見つけようとするのは空虚なことだろう。作者である天童荒太は 7 年間かけてこの「いまこの時代に一番いてほしい人」を描いたという。それはずしりとした質量をもって確かな形で生まれたと思う。静人は物語を通して私たちに「生と死の重み」という根源的な問いを放っている。今、身の周りにはあらゆる情報があふれている。朝から晩まで流れ続ける情報をどう受け止めればいいのか分からない人はその洪水に溺れ、やがて無関心になった。中東で起こる戦争も、3 万人の自殺者も、隣町の交通事故死亡者も自分には関係のない「死」だ。ましてそれらの人の「生」が気かけられることはほとんどない。人は忘れる生き物、そのことは理解している。しかしメールマガジンのように定期的に私たちのもとに届けられる悲惨な事件・事故を見て静人が、悼む人がどこかにいてほしいと願うのは私だけだろうか。